

論説 特報

台湾総統選で 独立志向の与党
民主進歩党(民進党)の蔡英文総統
が勝選した。

山田健太の ジャーナリズム 時評 12月の記事から

やまた・けんた 専修大学
ジャーナリズム学専攻教授・学
科長。専門は言論法、ジャー
ナリズム研究。日本ペンクラ
ブ専務理事。主著に「沖縄報
道」「若きジャーナリズム
第3版」「現代ジャーナリズム
事典」(監修)「放送法と権
力」ジャーナリズムの行方。



ゆく年くる年まぐり、回
顧や展望が紙面を飾る季節
だ。いわばこうした解説や社
説の多くは、これからの「時
代」を把握して書かれたもの
といえる。一方で、日々の
出来事伝える記事は、いま
という「時代」の一面をし
らせたものである。新聞は、
総合的な内容と多様な切り口
で、その時代を切り取り、記
録し、後世に伝える機能を果
たしている。ここではそ
うした新聞の動きを、図に示
した四つに分けて具体的に紙面
からみていくことにしよう。

(毎日第3水曜日掲載)

「速報」は命

第1のカテゴリーは、「いま」
起きてくることまぐりに伝える
新聞の基本動作の機能だ。テレ
ビやインターネットに伝達スピード
は劣るものの、いかに早く報
ずるかという「速報」は、報道の命
であることに変わりない。それは
三つの理由がある。

一つは、新聞の総合性や一
覧性に支えられ、一般の読者にとって
多くのニュースは、新聞で初めて
見るのが現実だからだ。自分の興
味のあふ領域に関しては、ネット
の方が早くして詳しいことは少な

くないが、世界各地の情報も含め、
広く手早く知るための手段として
は健在である。また、時系列がは
っきりしているのが紙メディアの
特徴でもある。デジタル化された
情報は、とりわけSNS上では新
旧の順番に関係なく届くことにな
るが、新聞ではそうした錯誤は起
きにくい仕組みだ。

二つには、一定程度の真実性の
担保があることだ。もちろん、新
聞にも誤りはある。しかし、幾重
もの関門を通過して紙面化されて
いる記事は、正確であることの保
証度が圧倒的に高い。その情報の
信頼性こそが、新聞のコストの対
価であるといえる。まさに「イ
ンタネット」の時代において、ア
ウトチェックを目的に行ってい
るのが、報道機関たる新聞とい
うことになる。ネット化された情
報の海の中で、受け手のリテラ
シーにより大きく依拠するのがイ
ンタネットといえるだろう。

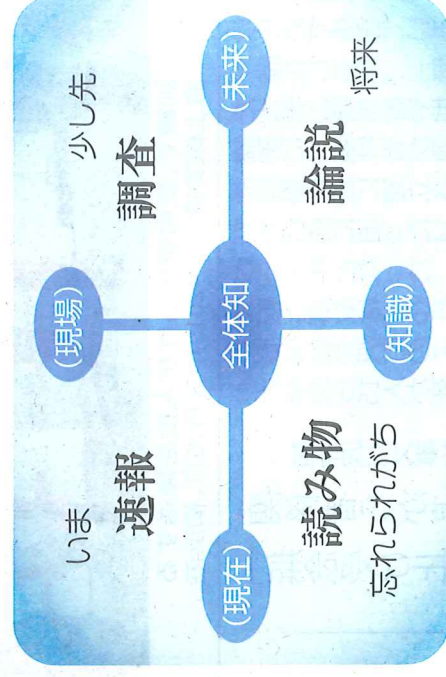
そして三つ目が、総合性と価値
づけのバランスである。新聞の強
みは幅広く取材対象領域で、さま
ざまな「いま」をピックアップし
ていることだ。それはいつとも
プロの目の選択によって価値づけが
られ、重要なものから大きな見出し
と紙面配置でツールとなる作り方
をしている。新聞批判の典型に、
記者の押し付けははらない、あり

時代をどう報じるか

のままを伝えてくれればよい、と
いうものがある。しかし、より多
くの事象を一定の限られたス
ペースで紹介するために、編集作業は
必ず必要で、そうした工夫の結果、
短時間でもさまざまなニュースを知
ることができるわけだ。

価値づけがバランスよくな
れ、いまが一目で理解できるこ
うな点からすると、年末年始を騒が
せた米のイン(司令官を殺害
した)攻撃や(巨産前会長の)コ
ーン出国は、本紙記者が直接取材
できないことを差し引いても、新
聞オリジナルライターが示されず未
端が残る紙面展開だ。たとえば、
ババンの政権不安や国債を伝え
るが、インの国債とコズ部
隊(革命防衛隊の精鋭)の関係を
解説するなど、立体的な紙面作り
によって、より「いま」が理解で
きるのではないか。

新聞は初報主義と言われ、初め
て紙面化する事象を一度だけ報じ
るを旨としてきた。しかし、多
くの複雑な背景を持つ事象の場
合、重層的にわかりやすく伝える
ことが必要だ。専門知識と最新情
報に裏打ちされた背景や美観を伝
えることが、新聞の質を高め、シ



タル時代における紙メディアの意
義を確認することになった。

現場力と知識

機能の第2には、「少し先」を
見据えて調べる「調査」報道など
と呼ばれるものがある。このた
めにはまず、取材者自身が問題意識
をもつことが必要だ。その上で、
一定の時間と労力を割くこと、
組織決定がなくては、なかなか美
現しない。昨今、調査報道の重要
性が語られ認識されても、日常的
な取材に乏しくして、どうも余
計な力をかけられるかという現実
の壁が、常に立ちばたかるとい
なる。しかし当たり前ではあるが、
こうした「投資」がなければ「資
産」は増えない。

いま連載中のやまぐり園をめぐ
る記事や、統合創生「ト施設(I
R)検証」のカテゴリーのもの
といえるだろう。とりわけ前者の
種類の記事を書くためには、取材
先との信頼関係を構築し、時間を
かけて取材を重ね、専門家の見解
や現場の状況を調べ、それでも記
事にできるかどうか悩ましい判断
が続くものと推察できる。本来で
あれば専属の記者を書けばよい
のだから、そのでないにしても
いま日本においてこうした調査
報道のインフラが備わっているの
は、新聞社が一歩だ。だからこ
その期待は大きいわけだ。

第3が、社会の中で「忘れられ
がち」(あるいは、見えない、隠
れがち)の、困っている人を助け
る、あるいは光を当てる作業だ。
ジャーナリズムの基本は弱い人の
側に立つことだといわれる。少し
立ち位置を委縮することで、い
とも違った見えてくる世界がある。
それは調査をするというだけでは
なく、「視点」を委縮するという
こともかもしれない。もっとい
うならば新聞社や記者個人の日常的

な学びの反映である。こうした
記事が日常的な出来事伝える記
事として掲載されることも少な
くないが、一般には「読め物」ある
いはライターものとして提供
されることになる。昨今では、
在日コリアンの人権問題にむか
へトスピーチ被害に関する記事
群はこのカテゴリーに当てはまる
だろう。

最後の第4が「論説」だ。「将
来」の大きな夢を表現するために
報じるという重要な役割がある。
よく大所高所から、と言われるこ
とがある。別の言い方だと机上の
空論ということになるのかもしれ
ない。しかし言論報道機関が、時
代の空気に流されることなく、毅
然とモノを言うことは必要だ。

とりわけ、社会が一つの方向に
なびきかたな際に、あらがえるか
どつかで真価が問われる。そし
た一大事にはなくても、表現す
べきゴールを把握し、筋を通すこ
とは大切だし、そうしたゴール設
定がないと、社会は変わらないた
らう。まさに「夢」を語ることが
大切であって、見えない未来を言
葉の力で可視化することのできる
のが新聞だろう。

最初のエッセイは、とりわけと言
えは「現場」力が試されるし、後
者の3つは、「知識」力がより
必要であると考えられる。さらに
いえば、この四つが有機的に結び
ついていることが大切で、相互に
関連し、あるいは同時進行で実行
されることでより大きな力が発揮
できるはずだ。

新聞は「全体知」を提示する重
要な報道媒体であるが、こうした
縦・横の軸を駆使し、さまざまな
種類の記事が掲載されることこそ
が、まさに新聞力そのものだ。進
に言えば、こうした機能をいかん
なく発揮し「時代」を伝えている
かどうか、新聞に問われている。
※カチ口に「」で解説も。

書籍化の
お知らせ

連載「時代の正体」第3弾「時代の正体 vol.3
忘却に抗(あらが)い、語りつづける」が現代思潮新
社から刊行されました。相模原障害者殺傷事件やヘイト

スピーチ、性差別の実態に多様な視点から追っているほ
か、改憲や道徳教科書を巡るルポなどを収録。1800円(税
別)で全国の書店で発売中。

屋と
う。屋
はい
の)の
の)と
遊し
手遊
を楽
し。ど
ご。
の被
ずと
の仕
示の
その
否か、
羊樹)

中国は立つ止まるべき